

【当日会場でいただいて未回答だった質問】

会場1－①玉井試験場(熊谷市)における令和7年度産水稻の作柄と気象による影響

質 問	回 答
高温による「彩のかがやき」、「彩のきずな」の受精阻害温度は何度くらいなのか？	高温による受精阻害については、開花期の最高気温が 35℃付近から増加するとされています。しかし、両品種ともに受精阻害温度に関する検討は行われておらず、具体的な数値は不明です。近年の夏作期間は高温傾向が強まっており、高温による不稔の発生は重要な課題と認識しております。今後も高温不稔に関する研究や発生調査に取り組んでまいります。

【オンライン参加者からいただいた質問】

会場1－③イネカメムシに対する薬剤の効果と効率的な防除体系

質 問	回 答
イネカメムシの吸汁痕は染色により調査可能とのことでした。これは吸汁直後から時間が経っても調査できますか？ また高温など他の理由による登熟不良との区別に利用できますか？	正確なデータは持ち合わせていませんが、一例としてイネカメムシが出穂期に多発したほ場で、収穫期(出穂期約 50 日後)に穂を採取して染色したことがあります。イネカメムシが発生しなかったほ場での不稔籾の割合を環境要因によるものとし、それを差し引いた不稔籾の約5割に吸汁痕が確認できました。乳熟期等に調査すれば、より高い割合で吸汁痕を確認できると思われます。少数のサンプルを正確に判断するのは難しいですが、主な原因を推測することには利用できると思います。また、すでに不稔となっている籾をイネカメムシが吸汁する可能性は低いと考えますので、吸汁痕のある不稔籾＝イネカメムシ原因の不稔籾としています。さらに、他の大型の斑点米カメムシでも吸汁痕が残りますが、イネカメムシでは籾基部に近い部分に吸汁痕が集中している特徴があり、判断材料の一つとなります。

質 問	回 答
<p>越冬世代成虫想定防除体系と、第1世代成虫想定防除体系を使い分ける方法・基準を教えてください。</p> <p>世代が切り替わるタイミングが基準になるという考えでよいのでしょうか？だとすれば、そのタイミングの目安はいつ頃でしょうか？</p>	<p>2025年の病害虫防除所による県内14ほ場でのすくい取り調査では、7月第4半旬から幼虫が捕獲され始め、7月第5半旬には成虫(越冬世代)が減少し始めました。8月第2半旬になると再び成虫(第1世代)が捕獲され始めたことから、埼玉県内における越冬世代成虫から第1世代成虫への切り替わりは7月下旬から8月上旬と思われます。</p> <p>防除体系の切替えのタイミングも上記に準じてとなりますが、越冬世代成虫と比較し第1世代成虫での薬剤の持続期間はやや短くなりますが、防除内容としては両者に大きな差はありませんので参考例の一つとして捉えていただき、厳密に切り替える必要はないと考えています。</p> <p>なお、貴県(群馬県)におけるイネカメムシの発生・被害は東毛地域で多いと聞いております。東毛地域であれば気象経過は当県平坦地と類似していると思われるので、イネカメムシの発生消長も当県と同様ではないかと考えています。</p>